

大慶寺旧境内遺跡（No.361）

寺分一丁目 939 番 1 の一部地点

例 言

1. 本書は、神奈川県鎌倉市寺分一丁目 939 番 1 の一部に所在する、大慶寺旧境内遺跡（鎌倉市 No.361 遺跡）内の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として、平成 26 年 5 月 26 日から平成 26 年 6 月 25 日にかけて実施した。調査面積は 60m²である。
3. 発掘調査は事業主（個人）より委託を受けた有限会社鎌倉遺跡調査会（取締役：齋木秀雄）が行い、齋木秀雄が調査を担当した。
4. 本書の執筆・編集は齋木が行った。また、出土遺物構成表は降矢順子が作成した。
5. 本書で使用した写真は遺構・遺物を齋木が撮影した。
6. 発掘調査・資料整理体制

現地調査

調査担当者	齋木秀雄
調査員	村松彩美、加藤千尋
作業員	丹野正弘、赤坂進

資料整理

担当	齋木秀雄
遺物実測	村松彩美
トレース	(遺物) 村松彩美 (遺構) 村松彩美 (デジタルトレース)

図版作成 加藤千尋

7. 本書で使用している遺稿・遺物の縮尺は以下の通りである。

全体図	1/120
遺構 溝	1/60
遺物	1/1、1/3

8. 本文中で使用している土丹（どたん）は鎌倉の丘陵部を崩した泥岩塊の地域用語である。
9. 発掘調査資料（記録図面、写真、出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括して保管している。

目次

本文目次

第一章 調査地点概観	384
第1節 調査地点の立地と歴史的環境	
第2節 周辺の調査	
第3節 調査軸の設定と堆積土層	
第二章 検出した遺構と遺物	388
第1節 1面の遺構と遺物	
第2節 2面の遺構と遺物	
第3節 3面の遺構と遺物	
第4節 3古代の遺物	
第三章 まとめと考察	398
第1節 遺構の年代	
第2節 遺跡の性格	

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	385	図6 溝	391
図2 調査区・グリット配置図	386	図7 出土遺物(1)	393
図3 堆積土層	387	図8 出土遺物(2)	394
図4 1面～3面全体図	389	図9 古代の遺物	397
図5 かわらけ集中	390		

表目次

表1 古代遺物カウント表	397	表4 遺物観察表(1)	401
表2 遺構観察表(1)	399	表5 遺物観察表(2)	402
表3 遺構観察表(2)	400	表6 出土遺物構成表	403

図版目次

図版1	404	2. 遺構7	
1. I区1面(南から)		3. 遺構41	
2. I区1面(東から)		4. 遺構21	
3. かわらけ集中(東から)		5. II区1面(北から)	
4. かわらけ集中(部分)		6. II区かわらけ集中(南から)	
5. I区遺構1堆積土		図版4	407
6. I区2面(南から)		1. II区2面(南から)	
図版2	405	2. 遺構69・78 遺物は灰釉陶器	
1. I区3面(南から)		3. 遺構30	
2. I区3面(東から)		4. 遺構41・45	
3. I区遺構27(溝・東から)		5. I区東壁(部分)	
4. I区据え桶		かわらけ集中の落ち込み。左下は岩盤	
5. 遺構46		図版5 出土遺物(1)	408
6. 遺構30		図版6 出土遺物(2)	409
図版3	406		
1. 遺構6			

第一章 調査地点概観

第1節 調査地点の立地と歴史的環境

調査地点は、鎌倉市寺分一丁目の北西に向かって開口する谷内に位置する。この谷には幾つかの支谷があり、調査地点は西に向かって開口する支谷内に位置している。この谷の奥には2mほど高い平坦面がある。現在は急角度の坂道で繋がっているが、階段で往来する地形であったと、周辺の状況から推測できる。この平坦面は、現在は谷奥が竹林で南側はアパートが建って明らかではないが、もともと全体が切り立った岩盤面に囲まれた一つの宅地であったと推測できる。岩盤面には、やぐらと思われる痕跡も残されている。調査地点は2m程高い平坦面の北西端にあたる。調査地点の地表面海拔は25mを測る。

調査地周辺はもともと深沢に含まれていた。『鎌倉事典』（東京堂出版、平成四年）に拠れば、深沢は現在の大仏辺から常盤、梶原、寺分、上町屋、笛田、手広、津、腰越、片瀬までも含む広い地域の名称であり、奈良時代は尺戸・片瀬の両郡内に、平安時代には鎌倉郡内の梶原郷に含まれていた。寺分の地名の由来は幾つか説があるが、寺分辺は小田原北条氏の『小田原衆所領役帳』に「須崎大慶寺分」と記された寺領であったが、下の二文字だけ残って「寺分」という地名になったという説が有力である。また深沢は鶴岡八幡宮二十五坊の内二十一坊の本料所になっていた。深沢地区に真言宗の寺院が多いのは鶴岡八幡宮とのつながりが深いためとも言われる。

調査地点周辺には寺院、神社が多くあり、調査地点北側の尾根を越えたところには駒形神社が、西110mには本地点の遺跡名である大慶寺がある。大慶寺は臨済宗円覚寺派の寺院で、山号は靈照山。寺伝等によれば、弘安年間(1278～1285)に無象静照がこの地に居住したのに始まったとされる。その後、元亨三年(1328)に円覚寺で行なわれた北条貞時の十三年供養記に道頭長老他僧衆八十三名が参加している。大きな寺院であったと推定される。大慶寺南100mには東光寺がある。東光寺は真言宗の寺院で、もと手広の青蓮寺末で現在は高野山宝寿院末。永享三年に高野山の慈眼院の法院靈範が隠居所として中興した。

東光寺の背後の山を越えた西には真言宗の等覚寺がある。もと手広の青蓮寺末、現在は高野山宝寿寺末。この寺は今の深沢中学校の辺にあって、御霊神社と境を接していたが明治六年に学校を建設するに際して現在の地に遷った。学校の建築に際して硯が沢山出土したと『鎌倉市史・社寺編』に書かれている。

御霊神社は本地点の南西200m、鎌倉市立深沢小学校の北にある。祭神は鎌倉権五郎景政。創建等は明らかではないが、鎌倉平氏の本居に祖神として祀られたと考えられている。社の南西には梶原景時の墓と伝えられる五輪塔がやぐらの中に安置されている。

本地点の西1100mには柏尾川に架かる古館橋があり、その北西には桓武平氏の村岡氏の居城と伝わる村岡城跡がある。梶原氏は村岡五郎忠通の弟、鎌倉権大夫景通の子景久が鎌倉郡梶原村に住んで梶原太郎を称したのが始まりとされる。

第2節 周辺の調査

周辺での調査は少なく、山沿いの横穴墓の調査(地点3)を除けば2地点で行なわれているに過ぎない。

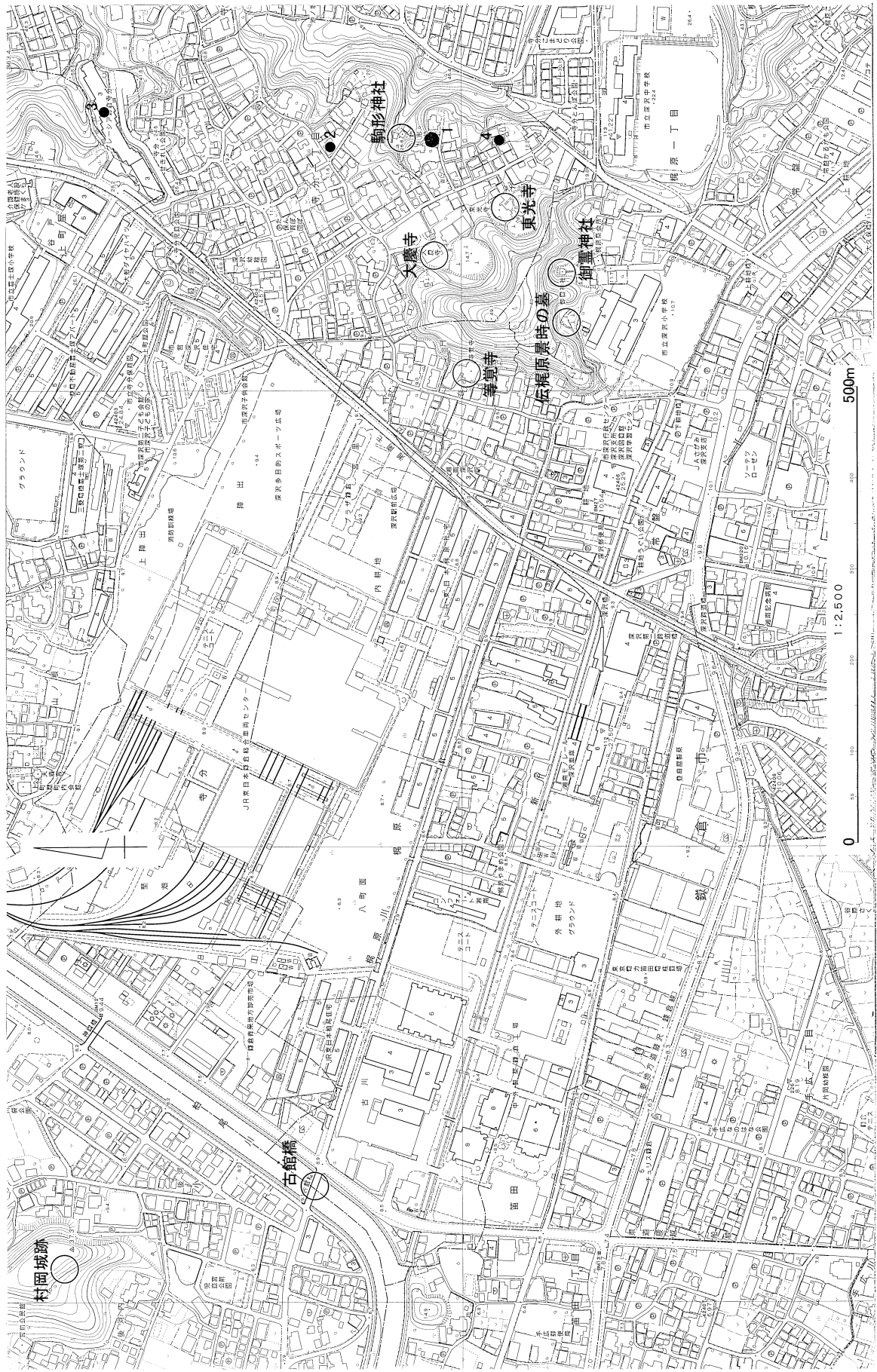


図1 調査地点と周辺の遺跡

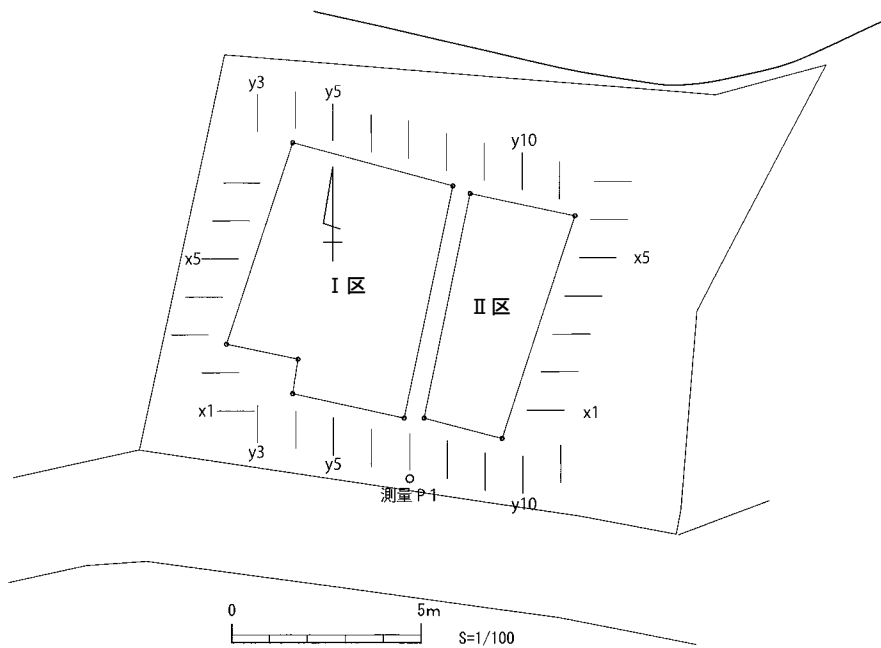


図2 調査区・グリッド配置図

本地点北130mに位置する地点2では4面の生活面が検出されている。最下層の4面では中世以前の遺物が多く、古墳時代中期までの年代が考えられている。次いで新しい3面では溝が多く検出され、中世後期から戦国期頃の年代が考えられている。1面と2面は近世の年代が考えられている。

本地点南300mに位置する地点4では5面の生活面が確認されている。最下層の5面では井戸が検出され、13世紀第4四半期～14世紀第3四半期の年代が考えられている。最も新しい1面では調査区を南北に縦断する土塁状遺構と溝が検出され、13世紀末以降の年代が考えられている。

これらの調査地点は、本地点と夫々が尾根を挟んだ小さな谷内に位置している。各地点の出土遺物の年代が異なるのは、時代によって使用される空間が大きく変化していることを示しているのかもしれない。

第3節 調査軸の設定と堆積土層

調査に使用した調査軸は国土交通省が公開している、都市再生街区基本調査杭（街区多角点10B66、節点1A442）から調査員が移動して作成した。調査区南に設定した測量ポイント1は緯度35° 19' 58"、経度139° 31' 22" でy軸は真南北方向を示している。

本地点の調査では10層の堆積を確認した。1層は現代の造成土でコンクリート片などを多く含んでいる。1'層は近世以降のかく乱層。2層は茶褐色の少し砂粒を含んだ土で中世遺物を少量含んでいる。攪拌された近世耕作土と判断した。3層はやや砂粒を含んだ暗褐色粘質土で炭化物や小土丹を含んでいる。中世遺物の包含層である。調査区北側では3層の下が削平岩盤面になる。やや攪拌された堆積と判断した。3'層は近世の遺物包含層。4層は暗褐色粘質土で少量の小土丹と多くのかわらけ皿片が混じっている。上面を1面とした。海拔13.30m前後。5層は明茶褐色粘質土で細かな土丹粒が多く混じり、かわらけ皿片も多く混じっている。6層は暗褐色粘質土で混入物が少なく硬い。鎌倉市街地で確認される中世基盤層に似ている。海拔13.10m前後。7層は黒褐色粘質土で混入物が少なく硬い。8層は暗～黒褐色粘質土で粘性が強い。古代から中世初めの遺物が混じる。9層はやや青みを帯びた褐色土で砂粒を少量含んでいる。上面は北から南に向かって斜面を呈している。10層は明茶褐色粘土層で、ベージュ色と呼称する場合が多い。調査区北側から南に落ち込む岩盤上に堆積している。11層は遺構覆土で炭化物を含んだ暗褐色土。

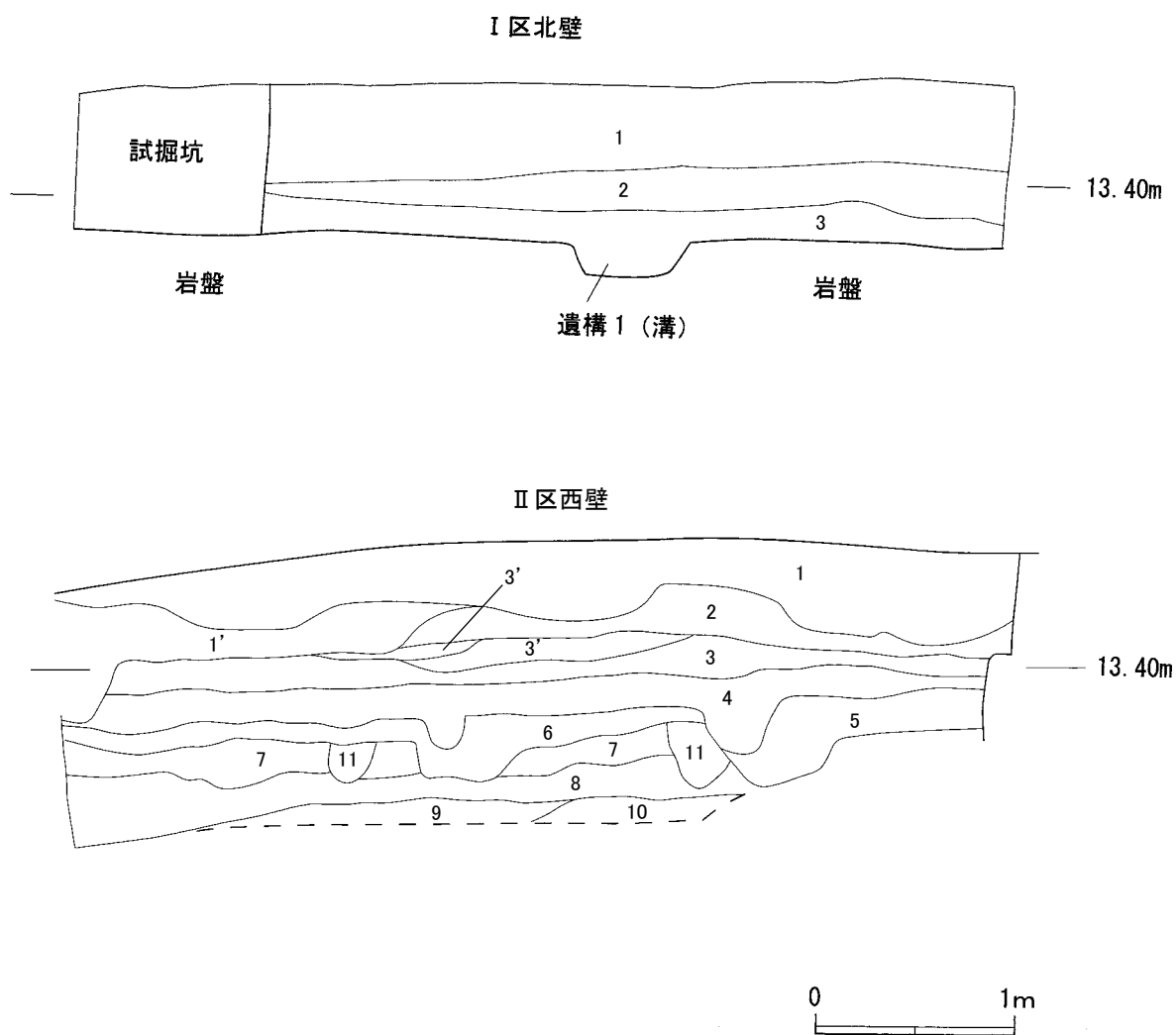


図3 堆積土層

(参考文献)

- ・「大慶寺旧境内遺跡（寺分一丁目943番2外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30』第1分冊
平成26年（2014） 鎌倉市教育委員会
- ・「大慶寺旧境内遺跡（寺分一丁目819番1地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』第2分冊
平成12年（2000） 鎌倉市教育委員会

第二章 検出した遺構と遺物

調査は残土を場内で処理をする都合もあり、対象地を東西に2分（I区・II区）する方法で実施した。調査では掘削機械でコンクリート片を多く含む表土を除き、以下の調査は人力で行った。まず西側のI区の調査を先行して、次いでII区の調査を行なった。I区の調査を先行したのは、試掘調査のトレンチがI区内に存在するためである。またII区の調査に際しては、崩落を防ぐため50cm幅でベルトを設定した。調査の結果、削平岩盤面とおよそ3枚の生活面（遺構検出面）とそれらの面に伴う遺構が検出された。以下説明を加えるが、調査時点の4面は、整理段階で斜面堆積の一部と判断したので、検出遺構と出土遺物をすべて3面に含めた。また、検出した柱穴・土坑については個々の説明を省いて文末に一覧表で表示した。

第1節 1面の遺構と遺物

1面には、現地表から70cm～80cm下、海拔13.30mで検出した削平岩盤面とその高さで検出した遺構群をあてた。しかし、堆積土層と見比べると本来の1面は岩盤面より10cmほど高い。整地層より岩盤面が一段低い状況は不自然なので、岩盤面は1面より下であった可能性が高い。また、かわらけ皿がまとめて廃棄されていた溝は岩盤面より上位から掘り込まれているので、2時期の遺構が混じった状況といえる。したがって本期に示した遺構のうち、かわらけが廃棄されていた溝と面上の遺構が新しく、岩盤面がやや古い年代である。また柱穴は新旧が区別できなかったのをまとめて図示した。

遺構は、北側の山沿いに削平岩盤面があり、その範囲はI区の西で2.5m、I区の東で1.2m、上面レベルは東13.30m、西13.20m、南13.20mを測る。上面はほぼ平坦であるが、緩やかに西と南に向かって傾斜している。南はかわらけ集中の北側で削平面が終わり、自然斜面が急傾斜で落ち込んでいる。岩盤面では溝1条（遺構1）、小さな柱穴2個が確認された。岩盤面南の面上では、明確な遺構は確認できなかったが、埋設桶が確認されている。

1面検出までに少量の遺物が出土し、7点が図示できた。このうち図8-49～52が1面を検出するまでの出土、図8-53～55は1面上の出土である。49はブルーのガラス玉で中央に孔があげられている。径4mm、高さ3mm、孔の径1mm。数珠玉の一部と考えられる。50は糸切りかわらけ皿で比較的薄いつくりである。51、52は瓦器の大皿あるいは焙烙と思われる製品。内外共に丁寧な磨きが施されている。53～55は糸切りかわらけ小皿で、いずれも薄手作りである。

遺構1

岩盤を掘り込んで造られた溝である。断面形は方形で、幅32cm～34cm、底面幅24cm、深さ22cm。底面レベルは東端で13.04m、西端で13.01m、長軸方向N-76°-Eを測る。本溝は調査区を斜めに横断して調査区の東西に延びている。調査地点付近では切り立った崖面まで5mの余地があるが、東側では崖面から1mほどの余地に減少する。調査地点近くの崖面の切り崩しが近代の行為と考えれば、本来は崖面近くに沿って谷内を巡っていたと考えられる。敷地の西は調査区から5mで1.5mほど低い隣地になるが、この溝がどのように延びていたかは不明。山際に掘られた排水路と考えられる。

遺物はかわらけ皿の小片などが少量出土した。うち2点が図示できた。図8-56・57は平瓦の破片で、56は表面に布目痕が残り、57は裏面に格子目の叩き痕が残っている。

かわらけ集中

本遺構は削平岩盤面の落ち際に沿って東西に延びている。当初は、試掘坑で確認されたかわらけ皿の廃棄遺構が東に細長く存在すると考えたが、I区の東壁を検討した結果、削平岩盤面の落ち際に作

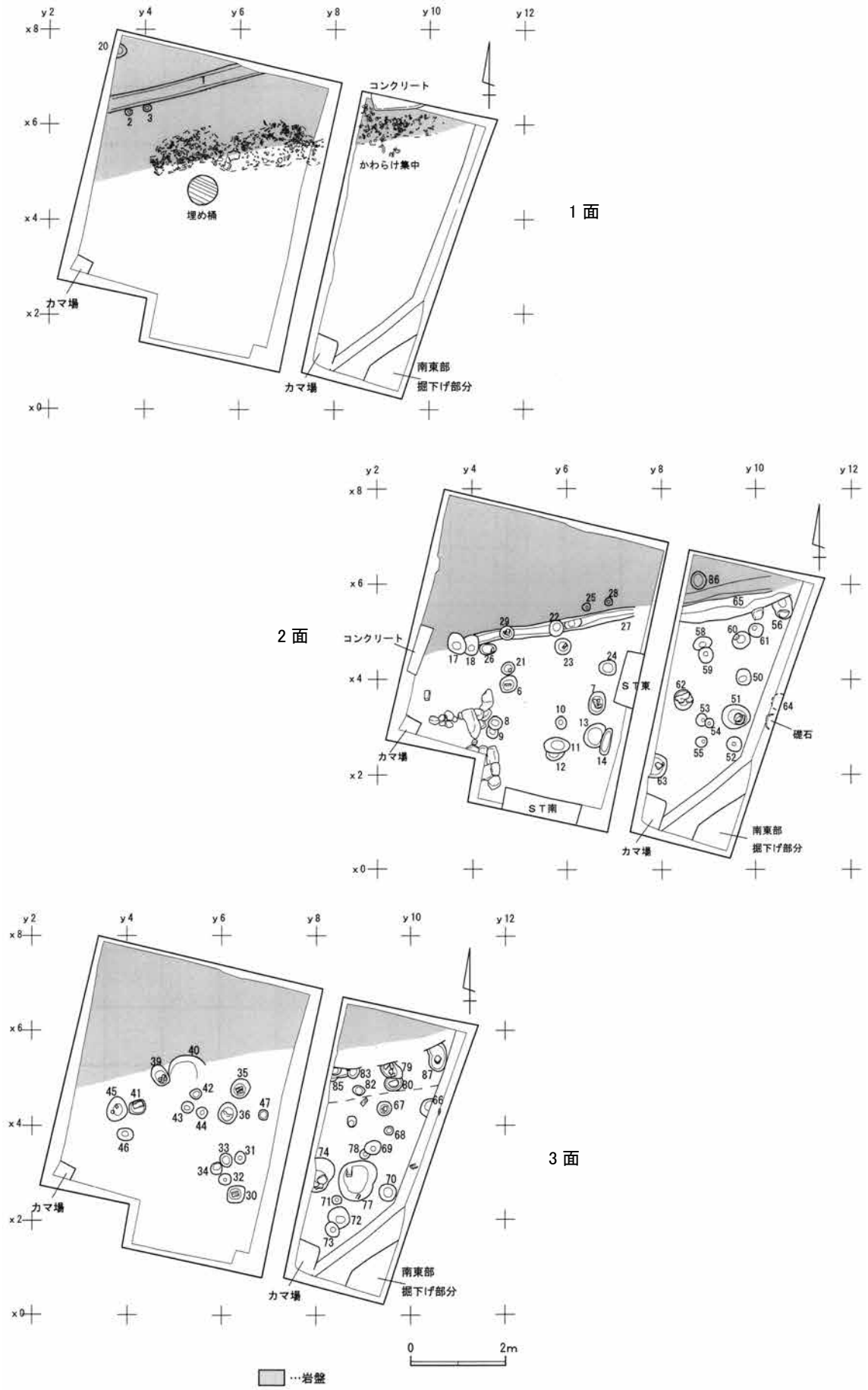


図4 1面～3面全体図

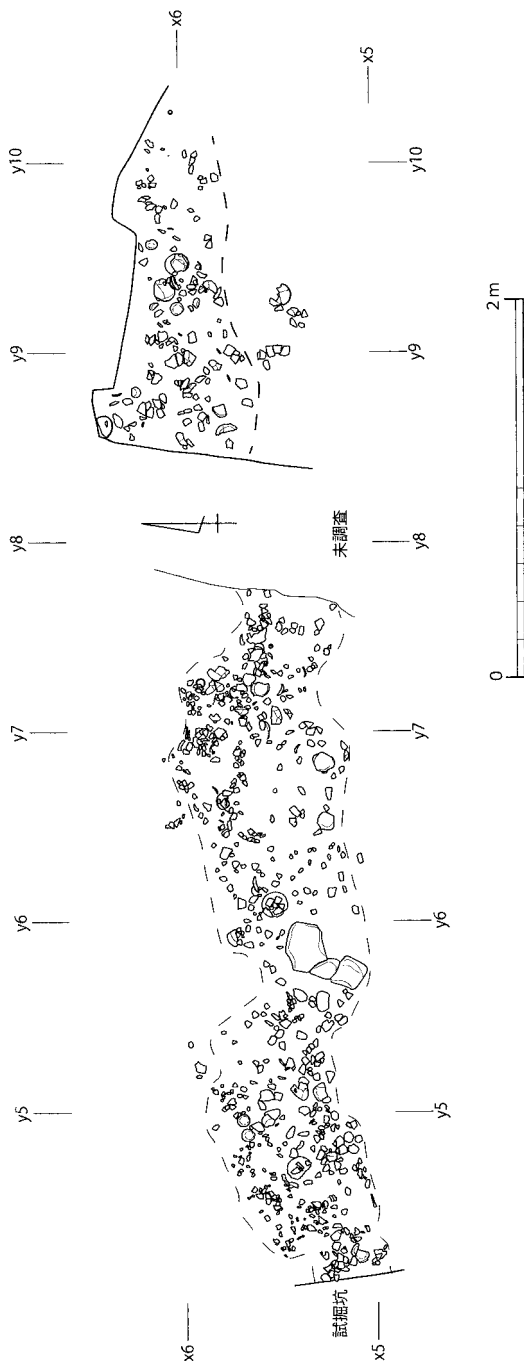


図5 かわらけ集中

られた浅い溝内に廃棄されていることが判明した。そのため、溝の平面形は明瞭に捉えられなかった。Ⅱ区で部分的に現代の建物で壊されているが、調査区の東西に延びていると考えられるので、全体としてはかなり多くのかわらけ皿が廃棄されていると思われる。溝はⅠ区の東壁で見ると、最大幅120cm、深さ20cmで浅い皿型の断面形を呈している。上部は土丹で埋められており、1面のある時期に埋められた遺構と判断した。長軸方向はN-80°-Eで遺構1とほぼ同じ方向である。

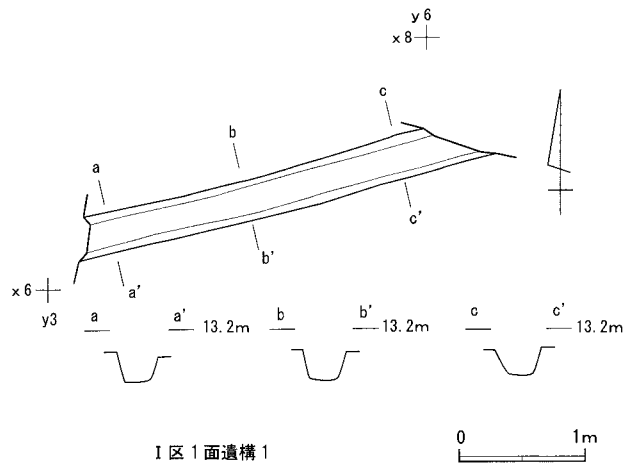
遺物は48点が図示できた。図7-1は鉄製と思われる鋳造された仏像で、胸部より上が残る。高さ(2.4)cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm。径2.1cmの円形後背を持ち、蓮弁のような花卉が頭部上に2箇所、その脇左右に1箇所ずつ作られている。右手に錫杖をもち、服装は僧衣と思われる。微笑みある地藏菩薩かもしれない。2は山茶碗窯系の捏ね鉢底部。3はコースター状の糸切りかわらけ皿で口唇部が僅かに内側に傾いている。4～31は糸切りかわらけ小皿で口径は7cm～8cm弱、薄手作りの皿は器高が高く底径が小さく、口径が大きい皿は器高が低く底径が大きい傾向がある。32～34は所謂中皿で薄手作りである。35～48は大皿で比較的薄手作りの皿が多い。

出土したかわらけ皿は非常に多く、B類(表6出土かわらけ分類、以下同じ)かわらけ皿の大皿が19,330g(重量、以下同じ)、同小皿が2,525g、C類かわらけ皿の大皿が7,125g、同中皿が400g、同小皿が1,722gである。これを個体数換算すると、B類大皿が107個体強(180g/1個体)、小皿が50個体強(50g/1個体)、C類大皿が44個体強(160g/1個体)、中皿が4個体(100g/1個体)、小皿が43個体強(40g/1個体)となる。検出部分で少なくとも248個体のかわらけ皿が廃棄されている事になる。

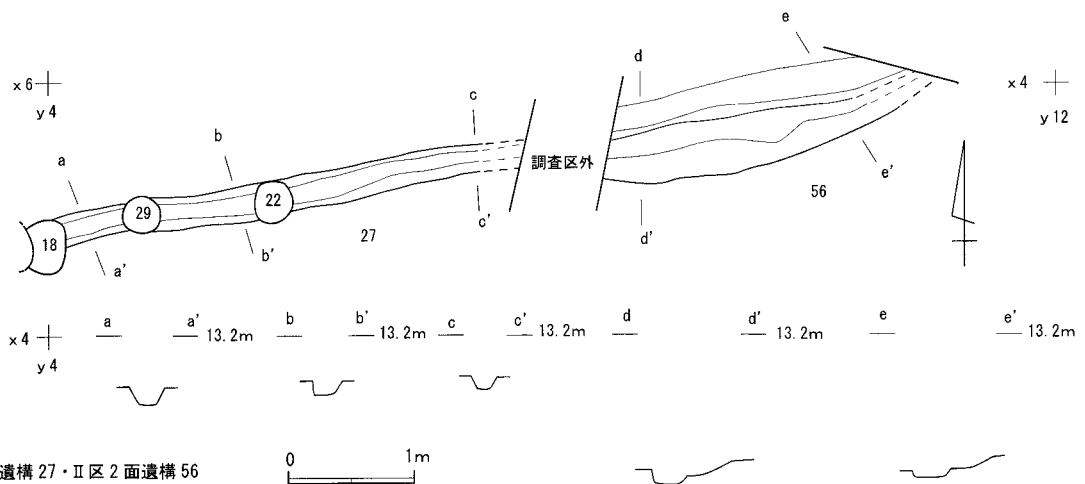
据え桶

底部と3cm～8cmの高さに残った側板が確認できた。側板は厚さ1～2mmの薄さで、桶のように縦板を並べた痕跡が残っている。据えるための掘り方は確認できなかった。直径70cm前後。埋設されたとすれば1面よりかなり高いレベルの生活面からの掘り込みであり、近世以降の埋設と考えられる。

覆土からの出土遺物はない。



I区1面遺構1



I区2面遺構27・II区2面遺構56

図6 溝

第2節 2面の遺構と遺物

2面には現地表下90cm下で確認した薄い版築面をあてた。削平岩盤面より10cm～20cmほど低い。遺構は岩盤面の落ち際に溝（I区遺構27、II区遺構56）が東西に走り、その南側の版築面上からは土坑、柱穴、などが検出されている。検出した柱穴は、配置が不規則で建物は復元できなかったが、類似した柱痕をもつ柱穴が2箇所を確認されている。また、I区南西隅で不規則に集中した土丹、鎌倉石を確認した。おそらく2面の段階では削平岩盤面はなかったと考えている。

2面検出までに少量のかわらけ皿片や常滑甕片などが出土したが、小片が多く図化できた遺物はない。
溝（遺構27・遺構56）

I区のかかわらけ集中を取上げる段階で確認した溝（遺構27）である。岩盤斜面上に堆積した10層を掘り込んで構築されている。I区ではかわらけ皿の取上げに集中したため溝の上部を掘り下げてしまった可能性がある。しかしII区ではかわらけ集中を取上げる際に注意して溝（遺構56）を掘ったため、本来の規模で確認できた。覆土は細かな土丹と炭化物を含む軟らかい暗褐色でかわらけ片を多く含んでいる。調査中には本溝の覆土上部に1面のかかわらけ集中が形成されたと考えていた。整理段階で別遺構と判断したため、ここでは別に提示したが、同一遺構の可能性は残る。

確認規模はI区で上幅28cm、深さ13cm～18cm、軸方向N-80°-Eを測る。II区では上幅70cm前後、深さ11cmを測る。底面レベルはII区の東端で12.79m、I区の東端で12.99～12.87mを測る。レベル数値では西から東に向かって流れる事になるが、II区では柱穴などが切り合っている可能性があ

り、本来は東から西に向かって流れたと考えている。

出土遺物の多くは少なく、図示できる遺物はない。覆土上部の遺物は1面のかわけ集中と共に取上げられた可能性がある。

遺構 21

I 区の中央近くで検出した。平面形は円形で確認規模は長径 28cm、短径 25cm、深さ 10cm、底面レベル 12.96m を測る。覆土は細かな土丹、炭化物を含む軟弱な暗褐色土で覆土上部から糸切りかわらけ皿がほぼ 3 個体出土している。

遺物は覆土内からかわらけ皿の小片が出土しているがいずれも小片で、覆土上部から出土したかわらけ皿が 2 点図示できた。図 8-58・59 は糸切りかわらけ小皿で、共に口径 8cm、器高は 1.7cm、1.8cm を測る。器肉はやや薄い、器高の低い作りである。

遺構 28

I 区の北東部、1 面のかわけ集中の下で検出した岩盤に掘り込んだ柱穴である。平面形は円形で、確認規模は長径 15cm、短径 15cm、深さ 30cm、底面レベル 12.78m を測る。覆土は細かな土丹、炭化物、岩盤の崩れた砂粒などを含む軟弱な暗褐色土。

遺物は少量出土したが、図 8-60 の 1 点が図示できた。60 は糸切りかわらけ小皿で復元口径 9.3cm、復元底径 6.5cm、器高 2.5cm を測る。器肉はやや厚く、中皿とも言える法量である。

I 区南西の石集中

I 区の南西隅で不自然にまとまった土丹、鎌倉石が確認できた。配置を見ると北から東にかけて L 字に曲がっているようにも見える。この集中は 1 面段階で鎌倉石が頭を覗かせており、本来は 1 面あるいはその上に属するものと考えられる。

石の配置を見ると、北側では 20cm 前後の土丹を乱雑に並べ、南では比較的平らな土丹を敷いている。これを本敷地に入る入り口あるいはスロープの一部と仮定し、トレンチを設定して掘り下げたが、確認は得られなかった。しかし、そのような施設の一部であったと考えている。

石の集中あるいはトレンチから遺物が出土しているが、図 8-61～63 が図示できたにとどまった。61 は極小糸切りかわらけ皿で復元口径 5.6cm、底径 4cm、器高 1.6cm で、側壁は直線的に立ち上がっている。62 は側壁が直線的に立ち上がる小皿で口径 8.7cm、底径 6.0cm、器高 2.7cm。本地点出土のかわけ皿では最も新しい 15 世紀後半代の年代が考えられる。63 は平瓦で表面に布目痕が残り、裏面には格子目の叩き痕が残っている。

柱穴列 1

I 区遺構 7 と II 区遺構 51 が樹皮を残した柱が残る柱穴であるが、建物などの構造物である可能性を考えた。木材は腐植が激しく樹木の表皮のみ残る状況で、柱であるのか杭であるのか判断できなかった。柱穴間距離 300cm を測る。遺物はわずかにかわらけ皿片が出土しているが、小片で図化できない。

第 3 節 3 面の遺構と遺物

I 区では現地表下 120cm で検出した炭化物等を含む暗褐色粘土層、II 区では現地表下 140cm で検出した暗～黒褐色粘質土(8 層)で確認した遺構を 3 面に含めた。したがって確認レベルには高低差がある。7 層は鎌倉市街地の調査で確認される中世基盤層に似ている土層で、8 層はそれ以下に堆積している土層である。両調査区の面上では柱穴、土坑が検出されているが、2 面から掘り込まれた遺構が混じっている可能性もある。また、II 区では調査時に 8 層で確認した遺構を 4 面遺構として扱ったが、堆積土

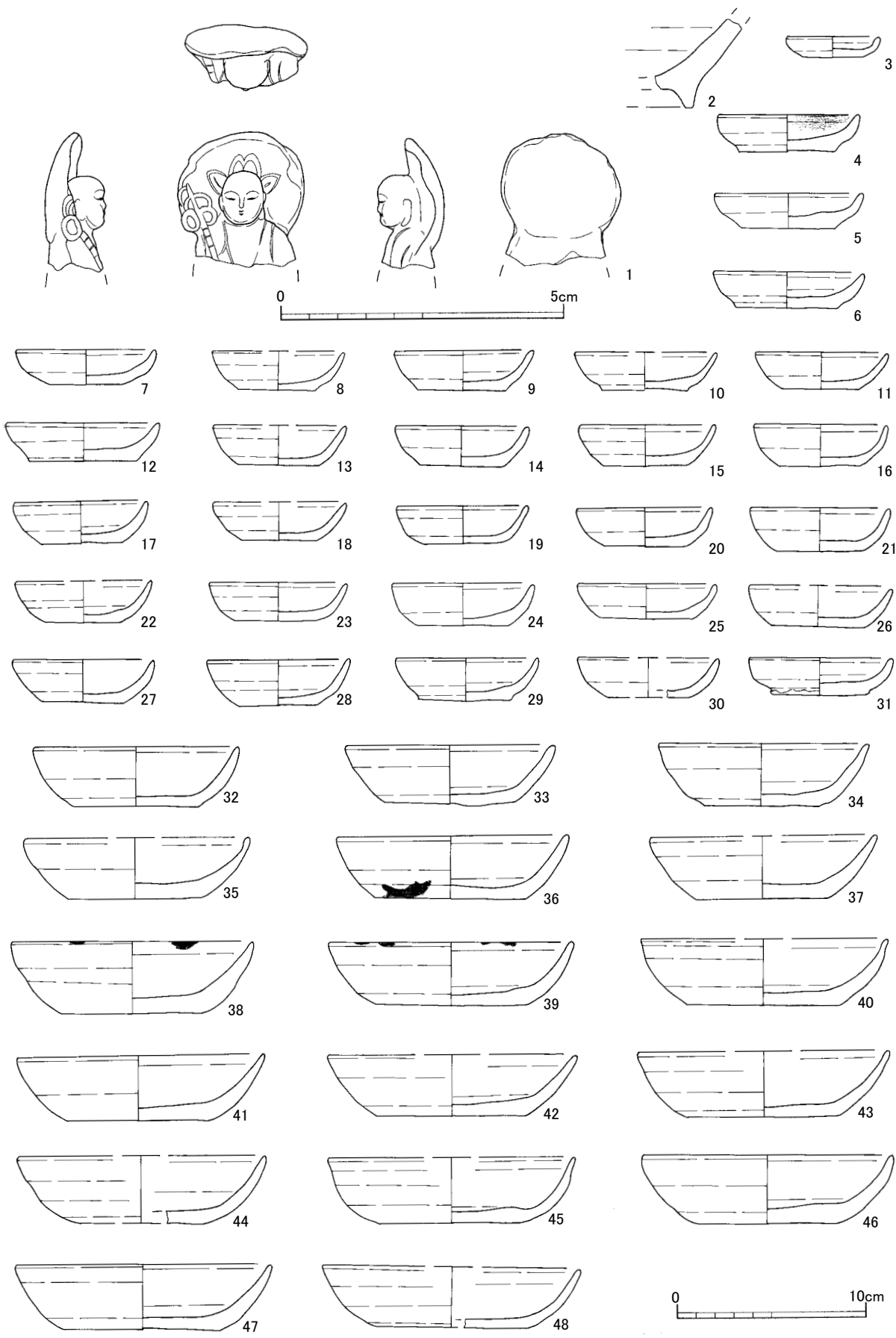


图7 出土遺物(1)

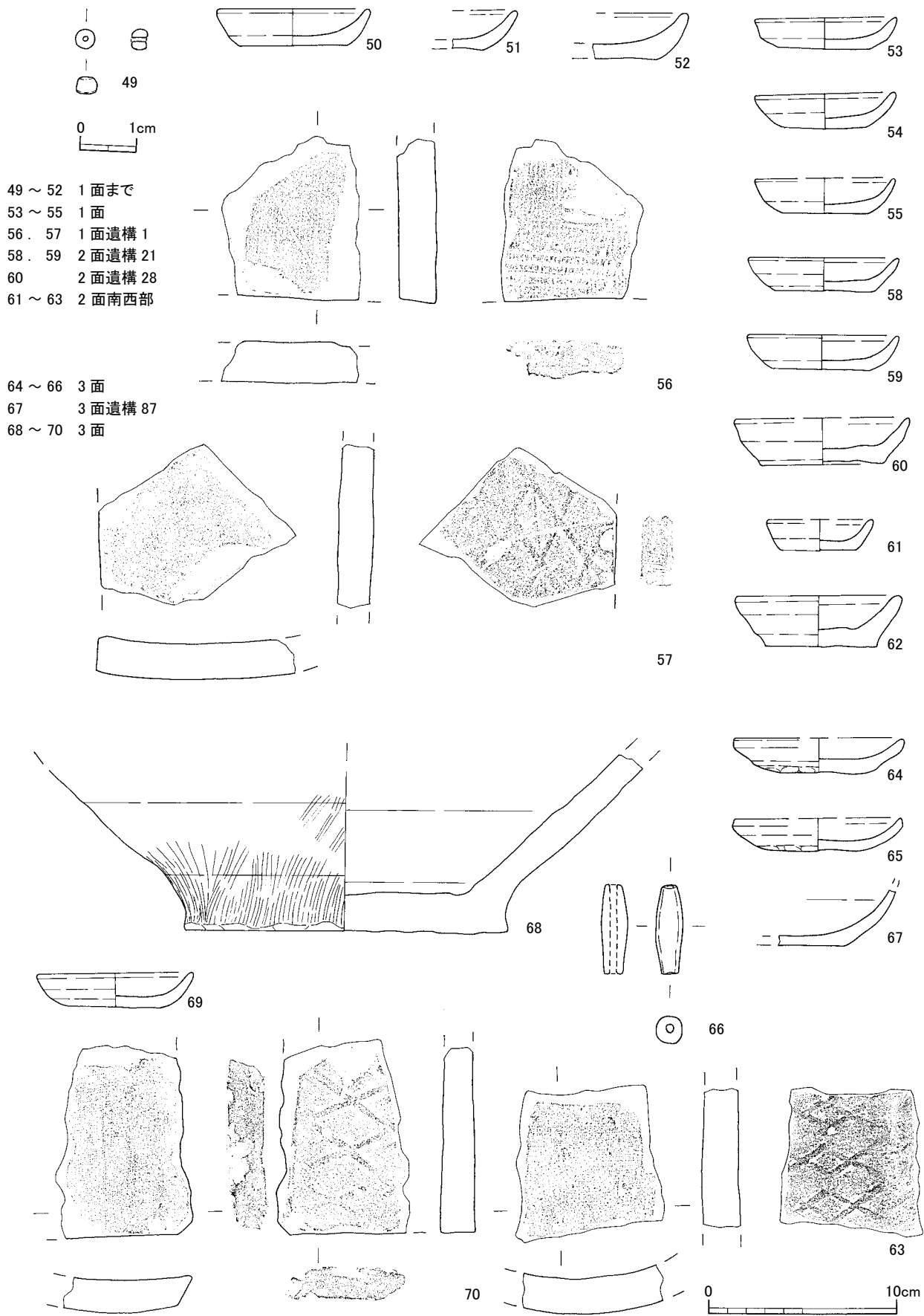


図8 出土遺物(2)

層の検討を含めた整理段階で8層を斜面堆積と判断したので、これらの遺構を3面からの遺構と修正した。そのため、4面は中世基盤層以下の堆積ではあるが生活面ではない。

遺構は土坑、柱穴が確認されたが配置が不規則で、建物としては掴めなかった。出土遺物には渥美窯甕の底部、山茶碗窯系の捏ね鉢、器肉の薄い手づくねかわらけ皿の他に中世以前の遺物が含まれている。図化できた遺物は図8-64～66、68～70に示した。

64・65は手づくねかわらけ小皿で共にやや薄い作りである。64の外低面には粘土板を張りあわせた痕跡が残る。65は口唇部がやや縁帯状に作られている。66は管状土錘で重さ10g弱。68は渥美窯の甕底部で胎土は白灰色で、底部から上に向かって板状の工具でなで上げた痕跡が残る。69は糸切りかわらけ小皿で器壁は薄く作られている。口径は8.2cmで小さい。上層からの混入と考えている。70は平瓦で表面に目の細かい布目痕が残る、裏面には格子目の叩き痕が残っている。

遺構 74

Ⅱ区の南側の西壁際で検出した。調査区外に約半分がある。平面形は円形で確認規模は長軸(70)cm、短軸(40)cm、深さ31cm、底面レベル12.29mを測る。覆土下部から中ほどにかけて焼けた鎌倉石が2個確認されている。柱穴の可能性もあるが、本遺構に対応する柱穴は確認できない。

遺物はかわらけ皿片や常滑甕片が出土しているが、図示できる遺物は無い。

遺構 77

Ⅱ区の中央近くで検出した土坑である。調査時点では2～3個の柱穴が切り合っているようにも見たが、結果として1個の土坑として扱った。確認規模は長軸85cm、短軸75cm、深さ28cm、底面レベル12.33m。底面北側には幅12cm、長さ22cmの礎板があり、南壁には細い角杭が打ち込まれているが、杭は本遺構には伴わない。

覆土は土丹、炭化物を含む軟らかい暗褐色土で、図化できる出土遺物はない。

遺構 87

Ⅱ区の北東部分で検出した。結果的に2個の柱穴が切り合っているような平面形になったが、1個の柱穴と判断した。平面形はやや中央部が括れた楕円形で、確認規模は長軸65cm、短軸40cm、深さ16cm、底面レベル12.57mを測る。覆土は炭化物や小さな土丹を含む暗褐色土で、底面中央に15cm大の土丹が見ついている。礎石代わりと考えたが確証はない。仮にこれが礎石とすると西の遺構79、遺構85も同様に覆土内に土丹が検出されており、関連を考えるべきかもしれない。ちなみにこれらの遺構との距離は遺構79までが100cm、遺構79と遺構85の土丹との間が100cmである。しかし、これに類似する柱穴は、調査区内で確認できていない。

遺物は、図8-67の1点が図示できた。67は糸切りかわらけ大皿で薄い作りである。土丹の下から出土しており、本遺構の年代近いと考えている。

3面からは手づくねかわらけ皿が、比較的多く出土している。出土したかわらけ皿は比較的薄い作りで、鎌倉で最も多く出土する器肉の厚い皿より若干古い様相を持っている。出土重量は大皿が1.670g、小皿が345gである。これを単純に1個体当たりの重量から個体数を算出すると大皿(1個体180g)が9個体、小皿(1個体80g)が4個体強となる。多く出土したといえる数ではないが、狭い面積の調査であり、鎌倉の外であることを考慮すると、注目すべきことと思える。

第4節 古代の遺物

本地点では中世各面の掘り下げ時、および中世遺構などから古代の遺物が出土し、Ⅱ区での出土量が比較的多かった。表1には出土位置と種別/器種ごとの破片数を示した。殆どが小片であるため全体の形状を知り得る資料は僅少であったが、こうした中、灰釉陶器や緑釉陶器の碗・皿に遺存状態の良好な資料が確認でき、供膳具の中では同時期の土師器や須恵器の坏より数量面で多い点の特筆できる。個々の遺物は磨滅が進んでいないことから、堆積土に伴う移動があったとしても、本来の使用場所は近くにあったと推察される。以下、図9に掲げた遺物について説明する。

1・2はロクロ土師器の坏。1は口縁1/4ほどが遺存。復元口径は13.0cm、胎土は砂質である。口縁部内面が薄く黒変している。2は底部1/6の破片。復元底径は6.0cm。底部には回転糸切り痕があったと見られるが、磨滅のため不明瞭である。3は土師器の小型甕。口縁部から胴部上位にかけて1/8ほどが遺存。胎土は砂質で雲母粒や泥岩粒を微量含んでいる。相模型の範疇に含まれよう。4も土師器の甕で三浦型。口縁部の小片で、頸部は外方に短く屈曲し、口縁端はヘラによって面取りされている。胎土は砂質で、白色針状物質や角閃石粒を微量含んでいる。5は土師器の口縁部小片で壺となろうか。口縁部外面に煤が付着する。胎土は緻密で、白色針状物質を含んでいる。

6は須恵器坏の底部片で、4/5周ほど遺存している。外底径5.5cm、内底径5.0cm。外底面には右回転の糸切り痕が残る。胎土は粗砂を多く含み、器表は灰色を呈する。7も須恵器で甕の口縁部片。内外面に回転ナデを施し、内面にのみ自然釉が掛かる。胎土は緻密で、白色の微砂を微量含んでいる。器表は暗灰色を呈する。

8～14は灰釉陶器。8～13は碗で、14は皿。小片も図示したが、胎土などの違いから、全て別個体と考えられる。8は口縁～底部まで図上復元できた唯一の個体。体部の外面下位には回転ヘラケズリの後、雑なナデ調整が施される。付け高台は体部の下端側に配され、高台内中央には回転糸切り痕が残る。灰釉は浸け掛けで、釉薬は光沢がなく白色化している。内面には重ね焼きの高台痕が残り、使用により滑らかになっている。上記の要素は折戸53号窯式の資料に伴う特徴であり、概ね10世紀前半の年代観が与えられる。復元値での口径13.8cm、底径6.8cmで、器高は3.9cmを測る。器表は灰色を呈し、胎土には石英粒や白色砂粒が微量含まれる。9は口縁～体部1/4が遺存。復元口径が16.2cmと大ぶりの碗である。灰釉は浸け掛けだが、外面は下地として刷毛塗り施釉されたようにも見える。胎土は微砂を多く含み、微量の黒色粒が器面に表出している。器表は灰色で、釉薬は淡緑灰色を呈する。10は口縁部～体部1/8が遺存し、復元口径は15.6cmを測るが、二次的被熱による歪みが強いため参考値とされたい。内外面に浸け掛けによる灰釉が残る。胎土には微砂が多く含まれ、僅かだが気泡が看取できる。器表は灰色で、釉薬は被熱のため光沢を失い白色化している。11は口縁部～体部の小片。外面には刷毛塗りの灰釉が見取れ、内面には厚い自然釉が掛かる。体部下位の外面は回転ヘラケズリの後、粗いナデで仕上げられている。胎土は微砂質で、微量の白色砂粒が含まれる。器表は灰色、釉薬は淡緑灰色を呈する。12も口縁部の小片。内外面に刷毛塗りの灰釉が施される。胎土は緻密・ガラス質で、器面には微量の黒色粒子が表出している。器表は灰白色で、釉薬は淡緑灰色を呈する。13・14も刷毛塗り施釉された口縁部の小片。13の内面は人工施釉後に厚めの自然釉が掛かる。胎土は13が微砂質、14が緻密で器面に黒色微粒が表出している。全体形の分かる資料が少ないため窯式の認定は難しいが、浸け掛け施釉の8～10が折戸53号窯式、刷毛塗り施釉の11～14が黒笹90号窯式に比定できようか。生産地は尾張～遠江の中に収まると見られるが、窯場の特定まではできない。

表1 古代遺物カウント表

種別	土師器							ロクロ土師器		須恵器			灰釉陶器		緑釉陶器
	比企型坏	その他坏	相模型甕	三浦型甕	武蔵型甕	その他甕	台付甕	壺	坏	坏	甕	瓶	碗	皿	碗
区	面	遺構													
I	2	35	1				1								
I	2	40				1									
I	2~3	南トレンチ								1					1
I	2~3	—	1				9	2			1				
II	2	58												1	
II	1~2	—	1	4	1		20	1	1	1	2		5	1	
II	2	—					7								
II	3	72								1			1		
II	3	—					1								
II	3	77													1
II	3	79		1											
II	2~3	—					20	1				1			

(図9 掲載遺物の出土位置)

1・2・4・5・9～14:

II区1面下～2面

3: II区3面

6: I区3面南トレンチ

7: I区3面

8: II区3面遺構44

15: II区2面遺構17

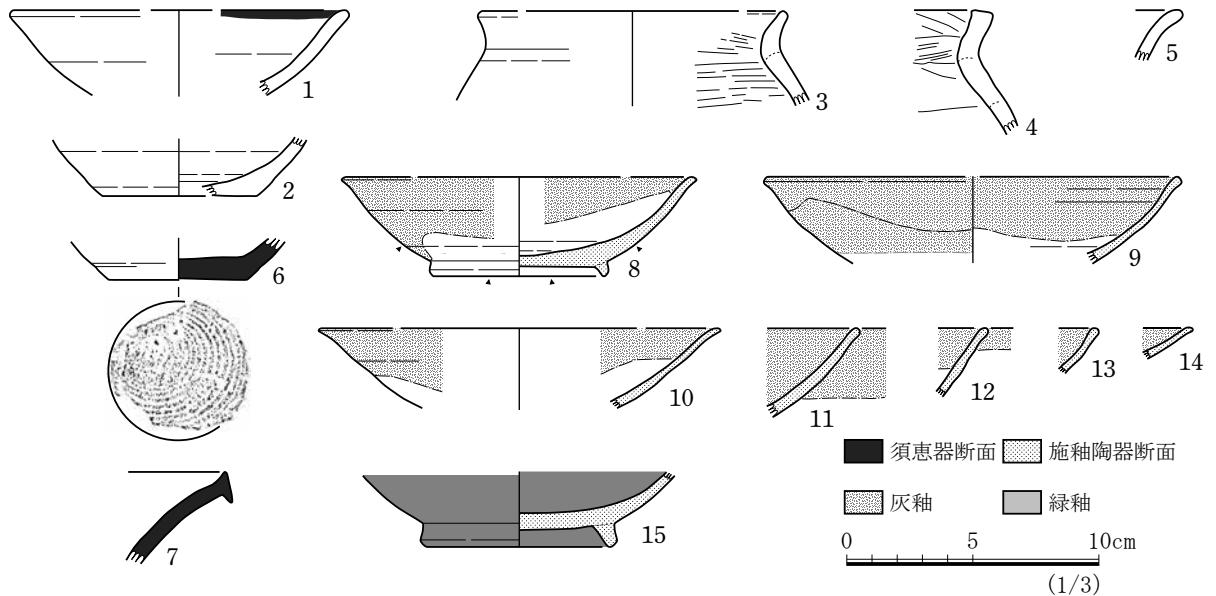


図9 古代の遺物

15は緑釉陶器碗の体部下位～底部。高台内も含め、遺存する器面全体に緑釉が施されている。内底と高台内には三叉トチン痕が残る。器面調整としてのミガキ痕は見て取れず、高台内～体部下位の外面には回転ヘラケズリ痕が確認できる。内面は被熱のためか黒く変色しており、一部で釉薬の銀化も認められた。胎土は緻密で微量の白色砂粒を含み、やや橙色味がかかった焼き色を発する。整形・高台の貼り付けなど、非常に丁寧に製作された印象を受ける。具体的な生産窯は特定できないものの、猿投・二川・美濃など東海地方の窯で10世紀前半頃に焼かれたものと考えられる(奈良文化財研究所・尾野善裕氏のご教示による)。高台径は7.0cm。このほか細片のため図示しなかったが、内外面にミガキ調整痕を残す猿投窯産であろう緑釉陶器碗の口縁部がI区3面の南トレンチで出土している。

第三章 まとめと考察

本章では調査で検出した遺構や出土遺物などから、検出遺構の性格や年代について若干の考察を加える。

第1節 遺構の年代

本地点では、2面から古代の緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。明確な遺構は検出できなかったが、9世紀から10世紀前半の年代が考えられる。3面からは口径9cm前後、器壁厚5mm～7mmの手づくねかわらけ皿が出土している。残念ながら鎌倉には出土かわらけ皿の統一編年がないため個人的な見解になるが、口径やや薄い作りであること等から、13世紀第1四半期頃の年代を考えている。1面のかわらけ集中には、口径7cm～7.5cm、底径が4.2cm前後、器高2.3cm前後で薄手作りの糸切りかわらけ小皿が多く含まれている。これも個人的な編年であるが、13世紀後半から14世紀初め頃の年代を考えている。また、明確な遺構に伴った遺物ではないが、口径8.7cm、底径6.0cm、器高2.7cmで側壁が直線的に外反する小皿も出土している。この年代は15世紀代を考えている。

以上のことから、本遺跡の成立時期は9世紀頃で、しばらく時間を置いて13世紀第1四半期から断続的に15世紀まで存続したといえる。

第2節 遺跡の性格

出土遺物から見れば、本地点には9世紀から10世紀前半にかけて緑釉陶器や灰釉陶器を使用できる人物が居住している。また、中世になると鎌倉以外では出土例の少ない手づくねかわらけ皿や渥美窯の甕片を使用できる人物が居住していることになる。しかし、10世紀後半から12世紀代は、相模地域でも土器が不明瞭になる時期であり、9世紀頃からここに居住を始めた一族が中世になって手づくねかわらけ皿を使用した可能性もある。鎌倉の旧市街地を離れた地域で手づくねかわらけ皿が出土することは極めて稀である。手づくねかわらけ皿の出土は、鎌倉時代の初期に鎌倉と密接な関係を持った有力な人物が住んでいたことを表している。とすれば、ここに居住した人物は平安時代後半から中世にかけて相応の力を持った人物ということになる。

本地点の西方1100mには柏尾川に架かる古館橋があり、その西方には平安時代の豪族村岡氏の居城と伝わる村岡城跡もある。梶原氏はこの村岡氏から派生している。ここでは想像をたくましくして、調査地点周辺に残る梶原氏に関する伝承等から、ここに居住した人物は梶原氏と関係があると考えておきたい。

大慶寺は、寺伝に拠れば13世紀第3四半期頃の成立である。1面のかわらけ溜りからは仏像や薄手つくりのかわらけが多量に出土しており、年代も一致する点が多い。また土地を所有する方からも先祖は大慶寺と関わりがあったとも聞いている。この頃までには大慶寺との関係が深くなったと考えられる。

今後この寺分地域と梶原氏あるいは村岡氏との関わりについて研究が必要と考えている。

表2 遺構観察表(1)

区	面	遺構番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	備考
I	1	遺構2	円形	16	12	11.5	13.10	
I	1	遺構3	円形	18	15	14	13.10	
I	1	遺構20	不明	30	(18)	15.5	13.07	
I	2	遺構6	円形	35	35	17.5	12.90	柱あり
I	2	遺構7	楕円形	47	35	6.5	13.00	丸柱、焼けた石あり
I	2	遺構8	円形	30	26	7.5	12.96	
I	2	遺構9	円形?	25	(16)	8	12.94	遺構8に切られる
I	2	遺構10	円形	25	22	15.5	12.89	
I	2	遺構11	楕円形	55	32	12.5	12.93	
I	2	遺構12	不明	(37)	(15)	5	12.99	遺構11に切られる
I	2	遺構13	楕円形	53	(40)	7.5	12.98	遺構14に切られる
I	2	遺構14	楕円形	55	15	7.5	13.00	(旧)遺構13
I	2	遺構17	楕円形	47	36	24.5	12.81	遺構18を切る
I	2	遺構18	楕円形?	42	(26)	19.5	12.81	遺構17に切られる
I	2	遺構21	円形	28	25	10	12.96	かわらけ皿出土
I	2	遺構22	円形	33	30	12.5	12.94	遺構27の溝内
I	2	遺構23	円形	35	34	17	12.90	礎板?
I	2	遺構24	円形	36	31	17	12.92	
I	2	遺構25	円形	17	15	6	13.01	かわらけ集中の下
I	2	遺構26	楕円形	35	24	24.5	12.77	柱あり
I	2	遺構28	円形	15	15	30	12.78	かわらけ集中の下
I	2	遺構29	円形	30	27	35	12.66	遺構27の溝内、礎板あり
I	3	遺構30	方形	39	36	14.5	11.94	礎板あり
I	3	遺構31	円形	27	25	16	11.90	
I	3	遺構32	円形	27	22	20.5	11.87	
I	3	遺構33	円形	30	25	17	11.89	
I	3	遺構34	方形?	25	25	17	11.88	
I	3	遺構35	円形	45	40	19.5	11.88	礎板2枚あり
I	3	遺構36	楕円形	45	39	32	11.75	
I	3	遺構37	方形	(55)	(30)	15	12.07	
I	3	遺構39	楕円形	45	32	37.5	11.76	礎板2枚あり
I	3	遺構40	方形	(77)	(45)	20	11.96	
I	3	遺構41	方形	35	30	29.5	11.74	礎板あり
I	3	遺構42	方形	21	21	20.5	11.84	
I	3	遺構43	円形	25	25	9	11.94	
I	3	遺構44	円形	25	22	8	11.95	
I	3	遺構45	楕円形	50	45	32.5	11.68	杭あり

表3 遺構観察表(2)

区	面	遺構番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	備考
I	3	遺構 46	楕円形	35	25	16	11.84	礎板あり
I	3	遺構 47	円形	20	19	12		
II	2	遺構 50	円形	35	30	24	12.63	
II	2	遺構 51	円形	57	50	16	12.66	柱(丸太?)あり
II	2	遺構 52	円形	30	30	10	12.71	遺構 54 に切られる
II	2	遺構 53	円形	26	(20)	8.5	12.78	
II	2	遺構 54	円形	20	(19)	24	12.61	
II	2	遺構 55	円形	24	20	4.5	12.82	
II	2	遺構 56	楕円形	55	40	34	12.57	
II	2	遺構 58	円形	40	(23)	14	12.73	遺構 59 に切られる
II	2	遺構 59	円形	32	30	14	12.73	
II	2	遺構 60	円形	40	33	8	12.80	
II	2	遺構 61	円形	30	28	8.5	12.82	
II	2	遺構 62	円形	42	39	24	12.63	焼けた石あり
II	2	遺構 63	不明	50	(30)	6	12.79	焼けた石あり
II	2	遺構 64	不明	-	-	-		壁に焼けた石が見える
II	2	遺構 81	円形	25	24	8	12.22	
II	2	遺構 86	円形	35	32	16	12.62	
II	3	遺構 66	不明	40	(19)	8.5	12.51	
II	3	遺構 67	円形	30	28	14.5	12.44	柱あり(深さは柱のレベル)
II	3	遺構 68	円形	20	17	30.5	12.28	
II	3	遺構 69	円形	36	28	19	12.38	
II	3	遺構 70	円形	36	35	22	12.40	
II	3	遺構 71	円形	20	16	6	12.56	
II	3	遺構 72	円形?	46	(36)	28	12.43	
II	3	遺構 73	楕円形	32	25	30.5	12.30	
II	3	遺構 74	円形	(70)	(40)	31	12.29	石2個あり
II	3	遺構 77	円形	85	75	28	12.33	切り合いのため不明 礎板あり 杭あり
II	3	遺構 78	円形?	20	(16)	5.5	12.51	遺構 69 に切られる
II	3	遺構 79	楕円形	37	30	16	12.62	番号つけた
II	3	遺構 79	不整形	55	34	23	12.59	土丹3個 遺構 80 を切る
II	3	遺構 80	楕円形	38	(25)	-	-	土丹(礎石)あり 遺構 79 に切られる
II	3	遺構 82	円形	26	21	16	12.52	
II	3	遺構 83	楕円形	30	25	21.5	12.54	遺構 85 を切る
II	3	遺構 85	不明	(55)	45	31	12.70	礎石あり 遺構 83 に切られる
II	3	遺構 87	楕円形	65	40	16	12.57	かわらけ、石あり

表4 遺物観察表(1)

No.	図版 No.	面	遺構名	器種		法量			備考
						口径 / 長径	底径 / 短径	高さ / 厚さ	
1	7	1	かわらけ集中	土製品	仏像	[2.4]	2.2	0.9	
2	7	1	かわらけ集中	山茶碗窯	捏鉢	-	-	[4.6]	
3	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	4.9	3.0	1.1	
4	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	5.0	2.0	スス付着
5	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.8	5.0	1.9	
6	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.9	5.2	1.9	
7	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.4	4.0	1.8	
8	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7	4.0	2.1	
9	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.3	4.7	2.1	
10	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.5)	4.5	2.0	
11	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.0	1.9	
12	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.9	5.6	2.0	
13	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.0)	(4.2)	2.1	
14	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.2	2.1	
15	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.3	2.2	
16	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.2	2.3	
17	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.3	2.2	
18	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.0)	(4.0)	2.0	
19	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.0)	4.0	2.0	
20	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.2	4.2	2.1	
21	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.3	4.5	2.3	
22	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.2)	4.0	2.2	
23	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.3	4.3	2.0	
24	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	4.8	2.2	
25	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.4	5.0	1.8	
26	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.5)	5.0	2.2	
27	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	4.3	2.2	
28	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	4.1	2.4	
29	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	5.0	2.3	
30	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	(4.1)	2.1	
31	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	5.0	1.9	
32	7	1	かわらけ集中	かわらけ	中皿	10.9	6.7	3.1	
33	7	1	かわらけ集中	かわらけ	中皿	11.0	7.0	3.1	
34	7	1	かわらけ集中	かわらけ	中皿	11.0	6.0	3.2	
35	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(11.8)	(7.0)	3.2	
36	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(12.2)	8.0	3.3	スス付着
37	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(12.0)	7.0	3.3	
38	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	12.5	7.5	3.8	スス付着
39	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.0	8.0	3.4	スス付着
40	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	8.0	3.5	
41	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	7.5	3.4	
42	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	8.0	3.2	
43	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	8.0	3.4	
44	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	6.4	3.6	
45	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.0	7.5	3.5	
46	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.2	7.0	3.2	
47	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.4	8.2	3.5	
48	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.6)	8.0	3.2	

表5 遺物観察表(2)

No.	図版 No.	面	遺構名	器種		法量			備考
						口径 / 長径	底径 / 短径	高さ / 厚さ	
49	8	1	1面まで	ガラス製	珠玉	0.4		0.3	
50	8	1	1面まで	かわらけ	小皿	8.0	5.7	2.0	
51	8	1	1面まで	瓦器	碗?	-	-	[2.1]	
52	8	1	1面まで	瓦器	碗?	-	-	[2.4]	
53	8	1	1面	かわらけ	小皿	7.5	5.0	1.6	3枚並んで出土
54	8	1	1面	かわらけ	小皿	7.4	4.5	1.9	3枚並んで出土
55	8	1	1面	かわらけ	小皿	(7.4)	4.5	1.9	3枚並んで出土
56	8	1	遺構1	瓦	平瓦	[8.5]	[7.0]	2.2	
57	8	1	遺構1	瓦	平瓦	[8.5]	[10.3]	1.8	
58	8	2	遺構21	かわらけ	小皿	8.0	5.0	1.7	
59	8	2	遺構21	かわらけ	小皿	8.0	5.1	1.8	
60	8	2	遺構28	かわらけ	小皿	(9.3)	(6.5)	2.5	
61	8	2	南西部	かわらけ	極小	(5.6)	4.0	1.6	
62	8	2	南西部	かわらけ	小皿	8.7	6.0	2.7	
63	8	2	南西部	瓦	平瓦	[7.8]	[7.7]	2.0	格子状叩き文、布目痕
64	8	3	3面	かわらけ	小皿	(9.0)	-	1.8	手づくね
65	8	3	3面	かわらけ	小皿	(8.9)	-	1.8	手づくね
66	8	3	3面	土製品	土錘	4.8	1.4	0.5	
67	8	3	遺構87	かわらけ		-	-	[3.0]	
68	8	3	3面	渥美窯	甕	-	17.0	[9.5]	
69	8	3	3面	かわらけ	小皿	8.2	5.0	1.8	
70	8	3	3面	瓦	平瓦	[7.1]	[10.2]	1.7	格子状叩き文、布目痕

表6 出土遺物構成表

出土遺物構成(点数) ※かわらけを除く。

出土位置	常滑窯				山茶碗窯		瀬戸窯			
	碗・皿類	甕・壺類	盤・鉢類	その他	碗・皿類	鉢類	碗・皿類	壺・瓶類	盤・鉢類	その他
表採	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土掘削	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
～1面	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
1面	-	8	-	-	-	2	1	-	-	1
1～2面	-	3	-	-	-	1	2	1	-	1
2面	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
3面	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-
試掘坑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	0	18	0	0	0	4	3	1	0	2

出土位置	種別									
	渥美	魚住	亀山	緑釉	白磁	青白磁	青磁	土器質火鉢	瓦質火鉢	瓦質土器
表採	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土掘削	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
～1面	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
1面	-	-	-	1	1	1	1	2	1	2
1～2面	2	-	1	-	1	1	2	1	-	-
2面	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
3面	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
試掘坑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	3	0	1	1	2	2	4	3	3	5

出土位置	種別										合計
	瓦	土製品	木製品	鋳造関係	コースター	白かわらけ	古代土器 須恵器	近世陶磁器	その他		
表採	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
表土掘削	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
～1面	5	-	-	-	-	-	-	3	1	-	14
1面	5	1	-	-	-	1	-	6	1	-	35
1～2面	2	1	-	-	-	1	-	29	-	-	49
2面	-	-	1	-	-	-	-	11	-	-	15
3面	2	-	-	-	-	1	-	22	-	-	32
試掘坑	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
合計	16	2	1	0	1	2	68	5	1	148	

出土かわらけ構成(重量) ※単位はg(グラム)

出土位置	種別														合計
	A大	A中	A小	A極小	B大	B中	B小	C大	C中	C小	D大	D小	E大	E小	
表採	-	-	-	-	360	-	40	-	-	-	-	-	-	-	400
表土掘削	-	-	-	-	150	-	25	-	-	10	-	-	-	-	185
～1面	20	-	150	75	990	-	145	30	30	-	-	-	-	-	1,440
かわらけ集中	-	-	-	-	19,330	-	2,525	7,125	400	1,722	-	-	-	-	31,102
1～2面	-	-	-	-	560	-	100	-	-	-	-	-	-	-	660
2面	-	-	-	-	-	-	10	55	-	-	-	-	-	-	65
3面	-	-	-	-	230	-	60	-	-	-	1,670	345	25	30	2,360
試掘坑	-	-	-	-	640	-	5	40	-	20	-	-	-	-	705
合計	20	0	150	75	22,260	0	2,910	7,250	400	1,782	1,670	345	25	30	36,917

※かわらけ分類について

先頭のアルファベットは成形・器形を示し、Aを戦国・室町期(口縁部外反するロクロ糸切り成形)、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを初期かわらけに見られるロクロ底回転糸切り・静止糸切り成形で表面をナデ調整しないタイプとした。後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。コースターは器壁の極端に低い極小型かわらけを示す。

出土位置別かわらけタイプ比率

出土位置	分類					合計
	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ	Eタイプ	
表採	0.000%	100.000%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
表土掘削	0.000%	94.595%	5.405%	0.000%	0.000%	100.000%
～1面	17.014%	78.819%	4.167%	0.000%	0.000%	100.000%
かわらけ集中	0.000%	70.269%	29.731%	0.000%	0.000%	100.000%
1～2面	0.000%	100.000%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
2面	0.000%	15.385%	84.615%	0.000%	0.000%	100.000%
3面	0.000%	12.288%	0.000%	85.381%	2.331%	100.000%
試掘坑	0.000%	91.489%	8.511%	0.000%	0.000%	100.000%
合計	0.664%	68.180%	25.549%	5.458%	0.149%	100.000%

図版 1



1. I区 1面 (南から)



2. I区 1面 (東から)



3. かわらけ集中 (東から)



4. かわらけ集中 (部分)



5. I区 遺構 1 堆積土



6. I区 2面 (南から)



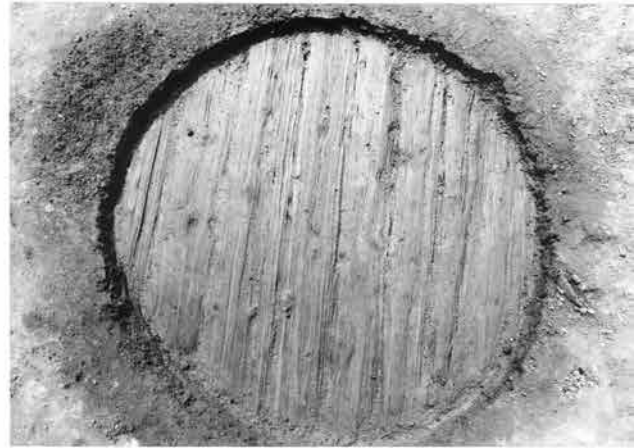
1. I区 3面 (南から)



2. I区 3面 (東から)



3. I区 遺構 27 (溝、東から)



4. I区 据え桶



5. 遺構 46

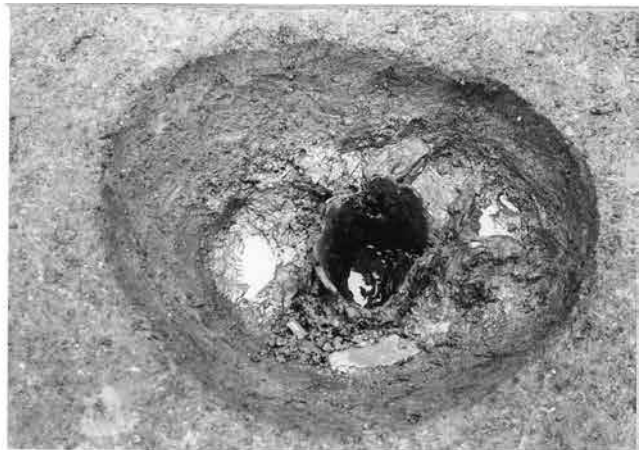


6. 遺構 30

図版3



1. 遺構 6



2. 遺構 7



3. 遺構 41



4. 遺構 21



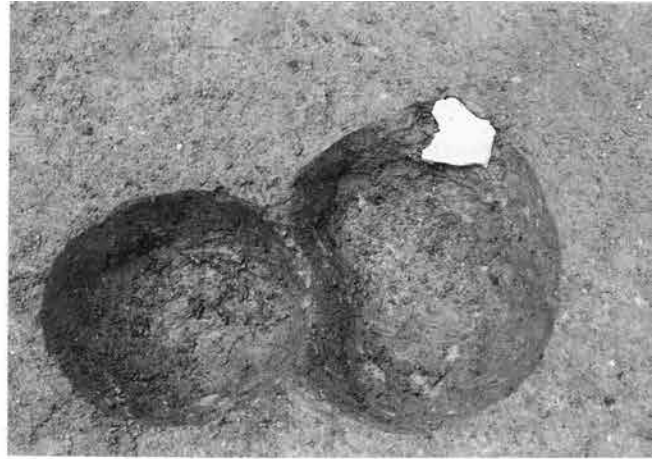
5. II区1面(北から)



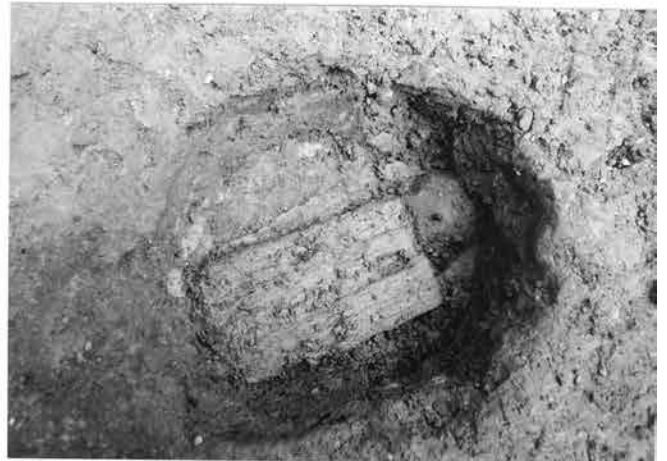
6. II区かわらけ集中(南から)



1. II区 2面 (南から)



2. 遺構 69、78
遺物は灰釉陶器



3. 遺構 30



4. 遺構 41、45



5. I区東壁 (部分)
かわらけ集中の落込み。左下は岩盤

図版5



図 8-49



図 7-1



図 8-68



図 7-2



図 8-52



白かわらけ (図なし)



山茶碗窯系 = 小鉢 (図なし)



山茶碗窯系 = 小鉢 (図なし)



図 8-56



図 8-63



図 8-70



図 8-57



図 8-66



図 8-62



上段 7-23、7-14
下段 7-19、7-7、7-29

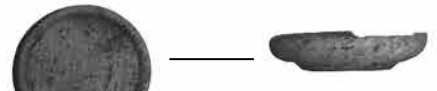
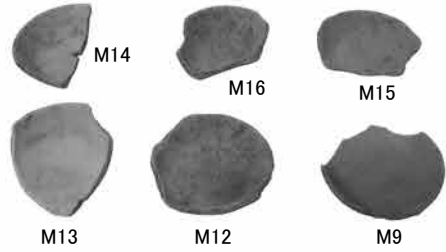


図 7-3



上段 7-40、7-38、7-46
下段 7-42、7-41



かわらけ集中小皿 (左上から 7-18、7-22、7-13
左下から 7-15、7-8、7-11)



図 7-42



図 7-34



図 7-25

図 7-5



図 7-38



図 7-46



図 7-18

図 7-11



図 8-64



図 8-65



図 8-64 (底部)



図 8-65 (底部)



図 9-15



図 9-8



図 9-9

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成26年度調査報告							
巻次	31 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	古田土俊一/福田 誠/沖元 道/根本志保/押木弘己/押木弘己/宮田 真・熊谷 満/齋木秀雄							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助二丁目 667番3外	14204	203	35° 19' 32"	139° 32' 37"	20060517 ～ 20060703	33.00	個人専用 住宅 (杭基礎)
どくらくじきゅうけいだいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺三丁目 330番6	14204	291	35° 18' 27"	139° 31' 34"	20070205 ～ 20070223	16.00	個人専用 住宅 (車庫の築造)
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 427番2外	14204	282	35° 19' 19"	139° 33' 18"	20070625 ～ 20070823	51.00	個人専用 住宅 (杭基礎)
べんがやついせき 弁ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座六丁目 640番2	14204	249	35° 18' 22"	139° 33' 18"	20090615 ～ 20090828	49.50	個人専用 住宅 (擁壁築造)
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 693番8	14204	253	35° 19' 31"	139° 33' 37"	20090914 ～ 20091120	33.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町一丁目 333番15	14204	242	35° 19' 04"	139° 33' 11"	20100609 ～ 20100723	22.50	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 939番10	14204	259	35° 19' 26"	139° 33' 52"	20110729 ～ 20110817	40.00	個人専用 住宅 (杭基礎)
だいいけいじきゅうけいだいせき 大慶寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 寺分一丁目 939番1の一部	14204	361	35° 19' 58"	139° 31' 22"	20140526 ～ 20140625	60.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	城館 社寺	中世	溝	かわらけ、国産陶磁器、 舶載陶磁器、瓦質製品、 石製品、木製品、獣骨	13世紀後半～14世紀 初頭の溝を検出。江戸 中期以降、崩落により 高台になった。
どくらくじきゅうけいだいせき 極楽寺旧境内遺跡	城館	古代	竪穴住居、土坑	土師器、須恵器、鉄滓	9世紀後半頃の竪穴住 居址を検出。
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	都市 城館	中世	掘立柱建物、土坑、 溝、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、鉄製品、 木製品、骨製品	12世紀末～13世紀後 葉にかけての遺構を検 出。遺構の軸方位は全 時期共通。
べんがやついせき 弁ヶ谷遺跡	城館	中世	井戸、溝、柱穴列、 土坑	土師器、須恵器、かわら け、国産陶器、舶載陶 磁器、瓦、石製品、金 属製品、木製品	12世紀末～15世紀前 半頃の池、掘立柱建物、 礎石建物を検出。屋敷 や寺か。
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	官衙	中世	土坑、木組み溝、 柱穴、杭列、	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦、銅銭、 金属製品、木製品	12世紀後葉～15世紀 前半の遺構を検出。御 所移転後は庶民居住区 となった。
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	溝、竪穴建物	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦質製品、 銅銭、金属製品、木製品、 石製品	13世紀～14世紀の溝 と竪穴建物を検出。
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	城館	中世	土坑、通路状遺構	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、瓦質製品、 金属製品、石製品等	13世紀前半～14世紀 にかけての通路状遺構 を検出。
だいいけいじきゅうけいだいせき 大慶寺旧境内遺跡	社寺	中世	溝、土坑、柱穴	土師器、かわらけ、国 産陶磁器、瓦、木製品、 鉄製仏像	9世紀～15世紀にか けての遺構、遺物を検 出。梶原氏や大慶寺と 関係か。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31

平成26年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成27年3月31日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 テクノヤマモト

